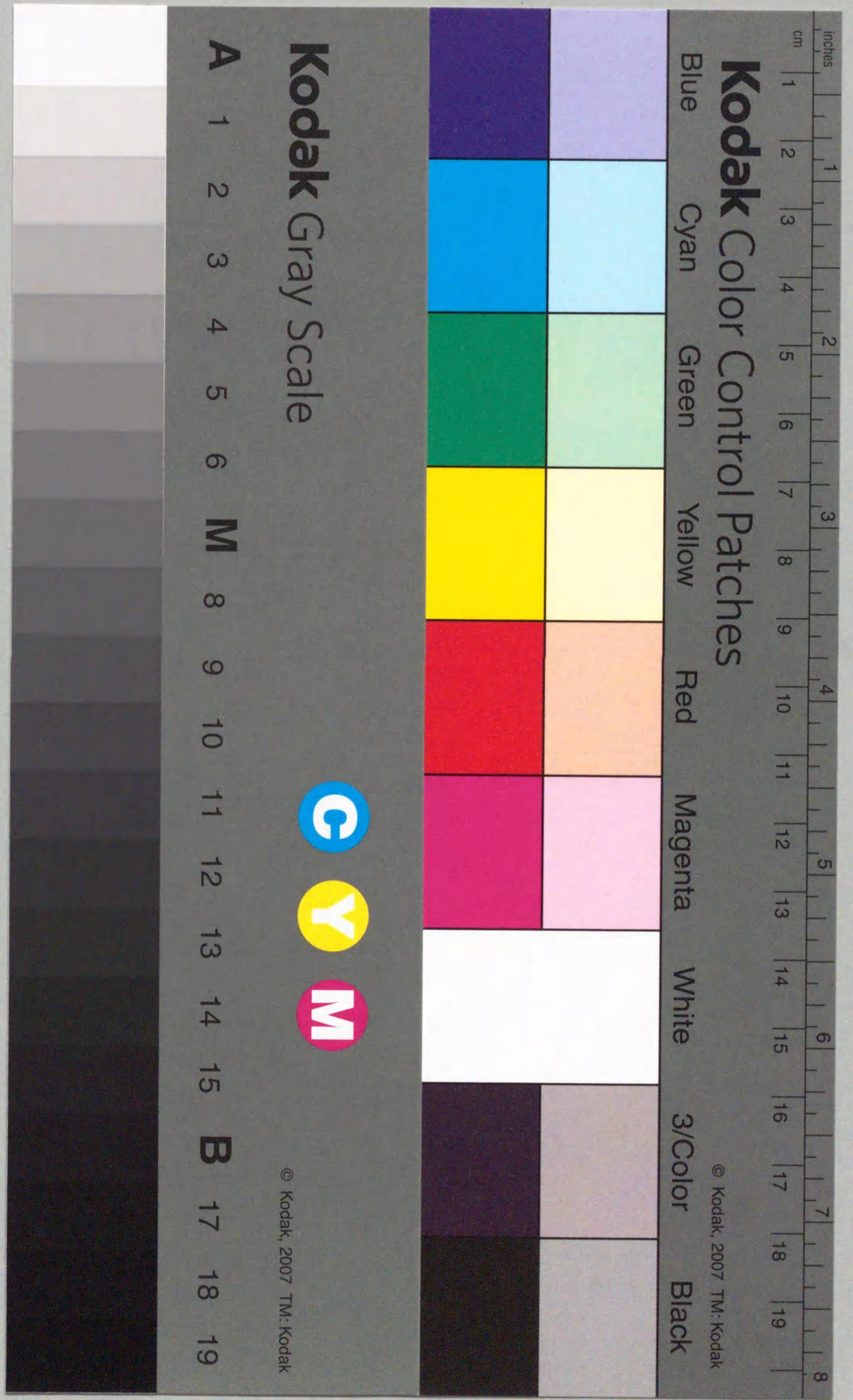


特46-68
1200500893139

特 4 6
68

幼年読本 第5編
日本立志談
国立国会図書館



幼年讀本第五

4139

217

196

日本立志談

巖谷小波編

梶田半古畫



東京博文館



例



一 例の幼年讀本第五編 題して日本立志談と云う、幼年

一 年諸君が模範とすべき日本偉人の立志逸話を網羅す、

一 英雄あり、豪傑あり、學者あり、忠臣あり、一片の

逸話わ優に其人一代の性行を覗うに足るべし。

一 本編よりわ文部省令に基き、傍訓、送假名に注意し

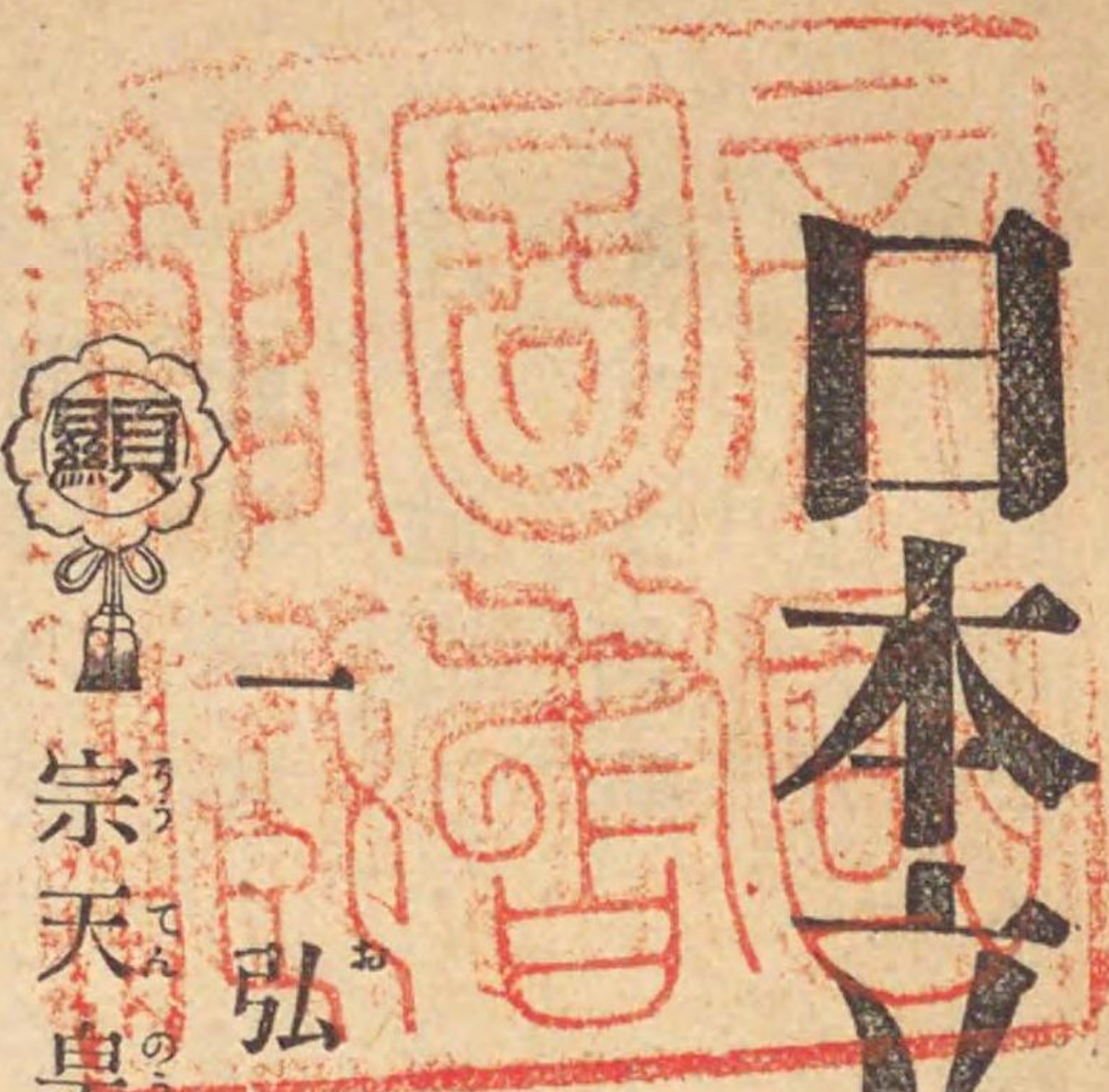
たりと雖も、また我所見を以て特に從來の假名を用

いたる個處も尠からず。

一 著者此編を草するに當つて、遇々獨逸洋行の運に會

したれば、槍忙の際次漸編中に加うべき二三を逸せ

弘計王
億計王



日本立憲談

幼年讀本

第五

巖谷小波編

一 弘計億計二王の遜讓

初めの名を弘計王、億計王と仰せられ、實は億計王の方が兄様で弘計王を弟御で居らしたたのです。

此御兩方わ履中天皇様の御孫で、市邊押磐と申上げた皇子の御子でありましたが、阿父様の押磐皇子が、雄略天皇様と戦を爲すつて、ごうく御殺されなさいましたので、此の御兩方わ逃げ出して、いろく御苦勞をなすつた揚句、播磨

り、讀者諒せよ。

明治三十三年九月

編者識

二

二
の國の赤石と云ふ所の細目と云う人の家で、卑しい丁稚奉
公をして居らつしやいました。

其中に雄畧様わ御崩去に成り、其次に清寧天皇様が御立
ちに成りましたが、御嗣兒が御一方も無いので、始終御心配
なさつて居らつしやいますと、丁度其時分播磨國の司今の
知事の様な役人の小楯と云う人が新嘗祭の御供物を集め
に細目の家え参りまして、或晩酒宴を初めました。

此時弟御の弘計王わ、兄様に向ひまして、なんぞ兄様！私
達も此間から此家の丁稚に成つて、約らない用をして居り
ますが、何時までこんな事斗りして居ても、ほんごに何の役
にも立たないぢやありませんか、それよりか、丁度今夜わ此
家に國司の小楯が來て居ますから、彼に會つて私達の事を

眞個に話してしまいましようか、そうしたら私達も、もう一
度世間え出られるかも知れませんが、こう云つて御相談な
さいました。けれども兄様の億計王に至つて、内氣な御方で
したから、未だ御遠慮なさいまして「いや、なまじ世間へ
出ようとして、又阿父様の様に殺されてもしてわ、夫こそほ
んごうに約らないぢやないか」と仰有るのを、弘計王又打
消して「なアに、例い運悪く殺されたつて、私達の身分を知ら
してやれば、それで可いでわありませんか、苟にも天子の家
に産まれた者がこんな下臣の家の丁稚に成つて、一生埋つ
て居る様では、阿父様にも申分がありません」と弘計王わ氣
の勝つた御方だけに、頻りごあせつて居らつしやいました。
其中に細目わこんな事ごは知りませんから、やがて御兩

方を呼びまして、小楯に云いますには、「この兒わ兄弟で御在
まして久しく私共で召使つて居りますが、かような卑しい
者に似合わず、まことに行儀が宜しう御在まして、何事もよ
く譲り合い、決して兄弟喧嘩を致しません、感心な者で御在
ます」と話します。小楯も氣に入つて「そうか、それわ可愛い
奴ぢや。それでは一つ舞を行つて見ろ！私が琴を弾いてや
るから」と云つて御兩方を舞わそうごしました。
「するご其舞の中で、第御の弘計王わ舞の歌に合はなな
ら」吾達は誰あろう履中天皇の孫であるぞ」と、初めて御名乗
りなさいましたから、小楯も細目も肝を潰し「さてこそ御行
儀も宜しい筈、御人品の氣高いもごもつごも。そうごわ知ら
ず御使ひ立て申して、まことに申分が御在ません」と俄かに

御兩方を上座え直して、御詫を申上げるやら、御機嫌を伺う
やら、大騒動に成りましたが、兎に角それで御兩方の御身上
がすつかり解りましたので、こう云う貴い御方々を、此様な
片田舎に御止め申してわ、御上に對しても申分が無いと直
ぐに時の天子様、清寧天皇様え申上げましたが、清寧様も
大層な御喜悅で、これこそほんごに天の神様が兒を二人お
さづけ下だすつたのだと、直ぐに御兩方を御迎えに成つて、
億計王わ兄様ですから皇太子、御次の弘計王を皇子に成す
つて、大切に御育てなさいました。
間も無く清寧様わ御崩去に成りましたので、御極まり通
り皇太子の億計王が天子様に、御成り遊ばさなければ成り
ません。



八
處が億計王わなかく御聞きに成りません。私達が此通り、播磨の國から迎ひ取られて、天子の子と云う貴い身分に、立ち戻つたところも、元わと云へば弟の弘計王が自分で名乗つた御蔭である。その弘計王をさし置いて、私が先に位に就く事わ出來ない。ご、こう仰有いまして、ごうしても御立に成りません。すると又弘計王の方でも「たごいこう云う身分に成つたのが、私の手柄であつたにせよ、兄様わ兄様、弟わ弟、まして皇太子に極まつて居らつしやる、その兄様を後にして、私が天子に成る事わ出來ません。」ご、これもなかく御立ちに成りません。

億計王は又「いゝえ、さうで無い。たごい私が兄だご云つて、只それわ年が上な斗りの事だ。弟でも手柄があつて、兄より

九
豪い者ならば、先に成るのわ當然の事だ。殊に天子と云ふものわ、一人で國を治めるご云う、大切な役目のあるもの。それにわそれ丈の力のある者で無ければ成れない。只兄だの弟だの、年が上だの下だの、そんな事を云つてる場合で無い。」ご、頻りに御勧めなさいましたので、弘計王も仕方無く、「それでわ兄様！まここに失禮で御在ますが、折角仰有つて下ださいますから、私が御先に立ちますで御座りませう。其代り貴君も、何卒御加勢遊ばして下さいませ！」ご、こゝでいよく、弘計王が弟御でわありましたけれど、先に立つて天子様に成り、それから此方が御崩去の後、初めて兄様の億計王が、御位を御嗣ぎに成りました。

處が此御兩方とも、御稚い時分から、田舎で、御奉公遊ばし

て、いろ／＼な御苦勞をなさいましただから、下々の事わよく御存知で、後に天子様に御成りに成つても、御仁慈が深う御在まして、政治に精を御出し遊ばしましたから、この日本國中も、まことによく治まりまして、民百姓も此の方々を、大層御慕い申ましたさ。

二 毛利元就の遺言

毛利元就云う人わ、織田信長や、豊臣秀吉や、徳川家康の時分より、少し前に居た人で、中々豪い大將でありました。此人が病氣に罹つて、もう死のうとする時に、大勢の子を枕邊え呼びまして、それから矢を其子の數丈出し、これを一束に結いまして、さて云いますには、『御前達わ丁度この矢の

様なものだ』と云いながらその一束を、一所に折ろうとしました。が、如何しても折れません。其處で今度わ束を解いて、一本々々に折りましたら、皆譯無く折れてしまいました。『それ如何だ御前達も此矢の様にみんな中好く一所に成つて居れば、決して折られる事わ無いが、若し喧嘩でもして、各々が一人／＼に成つちもうと直き他人に滅されても、うものだ。だから吾の死んだ後も、兄弟わ吃度喧嘩して成りませんよ』とよく云つて聞かせました。するに二番目の子の、小早川隆景云う人わ、中々伶俐な人で、したから、阿父さんの御話の後で、『ほんにそうで御在ます、一體兄弟喧嘩云ふものわ、御互いに遠慮をしないで、自分の慾を張ろうとするから起るので、この慾張を決し

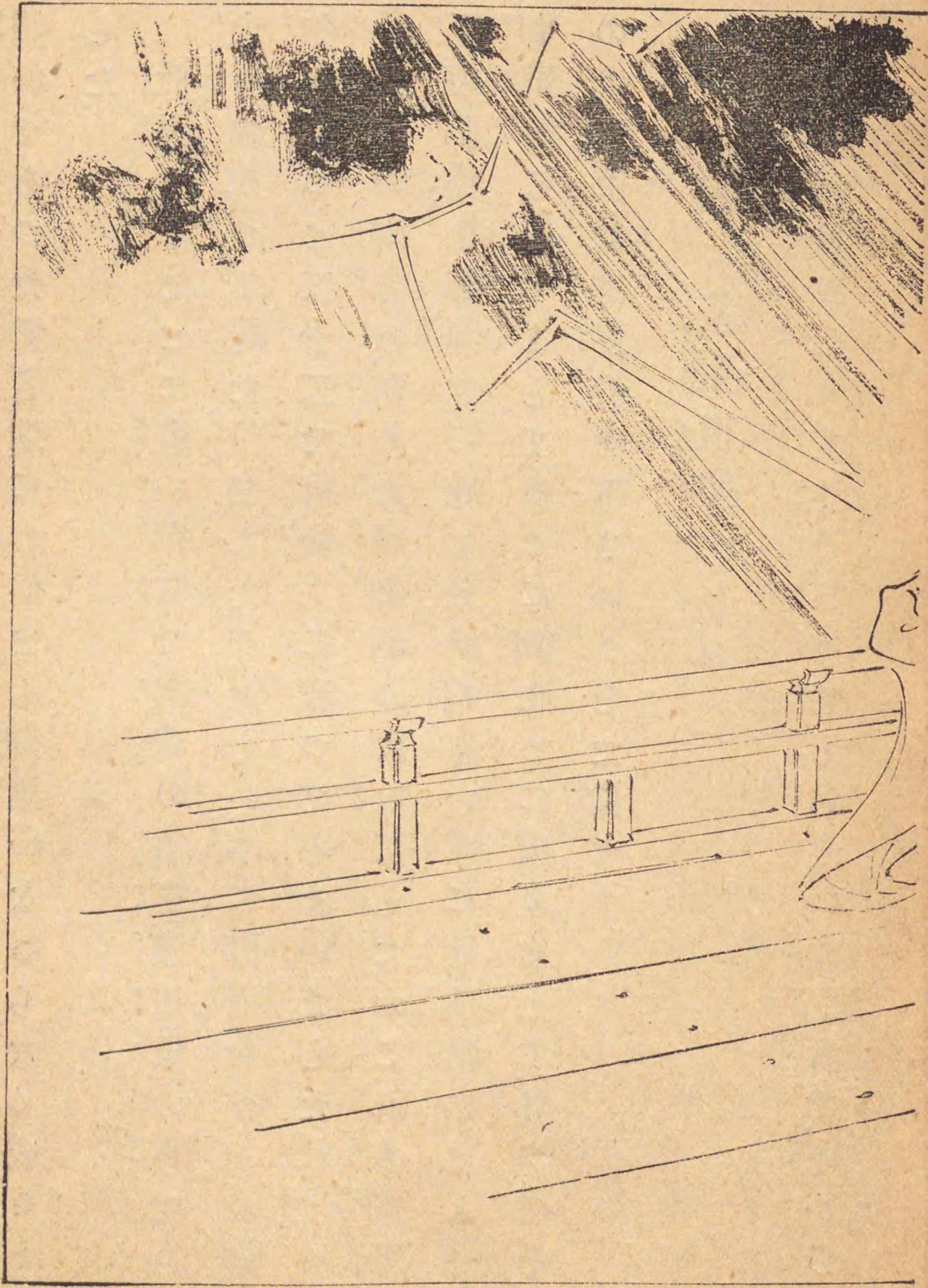


一四
てしないで、兄弟わ御互に助け合うと云う、親切な心さえ持
つて居れば、吃度仲好く仕て行かれますと云い、ましたので、
阿父さんの元就も「お、よく云つた。ほんごに隆景の云う通
りだから、他の者もよく氣をつけて、仲好くしなければいけ
ないよ」と云つて死んでしまいましたが、案の定其後輝元と
云う一番孫が、毛利の家を嗣ぎましてからも、小早川隆景に、
其兄さんの吉川元春が仲好く輝元の側に附いて、始終助け
て居りましたので、國はいよく、榮えまして、決して戦争に
敗けませんでした。

三 後光明天皇の御勉強

御光明天皇様、今から二百年ほど前の天皇様です、

此御方わ至つて學問が御好で、始終名高い學者を召して
は、種々な本を御勉強なさいました、が、御性來雷が大御嫌で、
此がゴロ／＼鳴り出すと、例も御機嫌が悪く、御殿の御奥え
御籠りになつて、何事も御手につきませんでした。
處がふと御考に成つて、これわ何と云ふ意氣地の無い事
だ、高の知れた雷位、それほ怖がる事も無いに……これと
云うのも、全く自分の氣が弱いからで、その弱い氣を直すこ
と、云う男らしい心が無いからだ、これでわ成らぬから、是非こ
の癖を直さなければ成らぬ、と、こう御心付になりました、今
度雷の鳴る度に、わざと御椽近く御進みに成つて、ちつと空
を御覽に成りました、すると初めの中は、矢張り御心持が悪
う御在りましたが、後にわ段々に御馴れに成つて、あれほど御



嫌いであつた雷も、遂にわ何ごも御思いなさらなく成りま
した。

此通りまことに豪い御方で、其時の將軍(徳川氏)の方でも、
大層恐がつて居た位でしたが、惜しい事に御壽命が無く、御
年がやつと二十二で、御崩去に成つてしまいました。
又この御方わ、初め大層御酒が御好でした。が、これも御下
臣の御諫を御聞きに成るご、成程悪い事に相違無いご、よく
御聽分に成りまして、直ぐに御止めになりまして、却つてそ
の御下臣に、御褒美を下さいました位です。

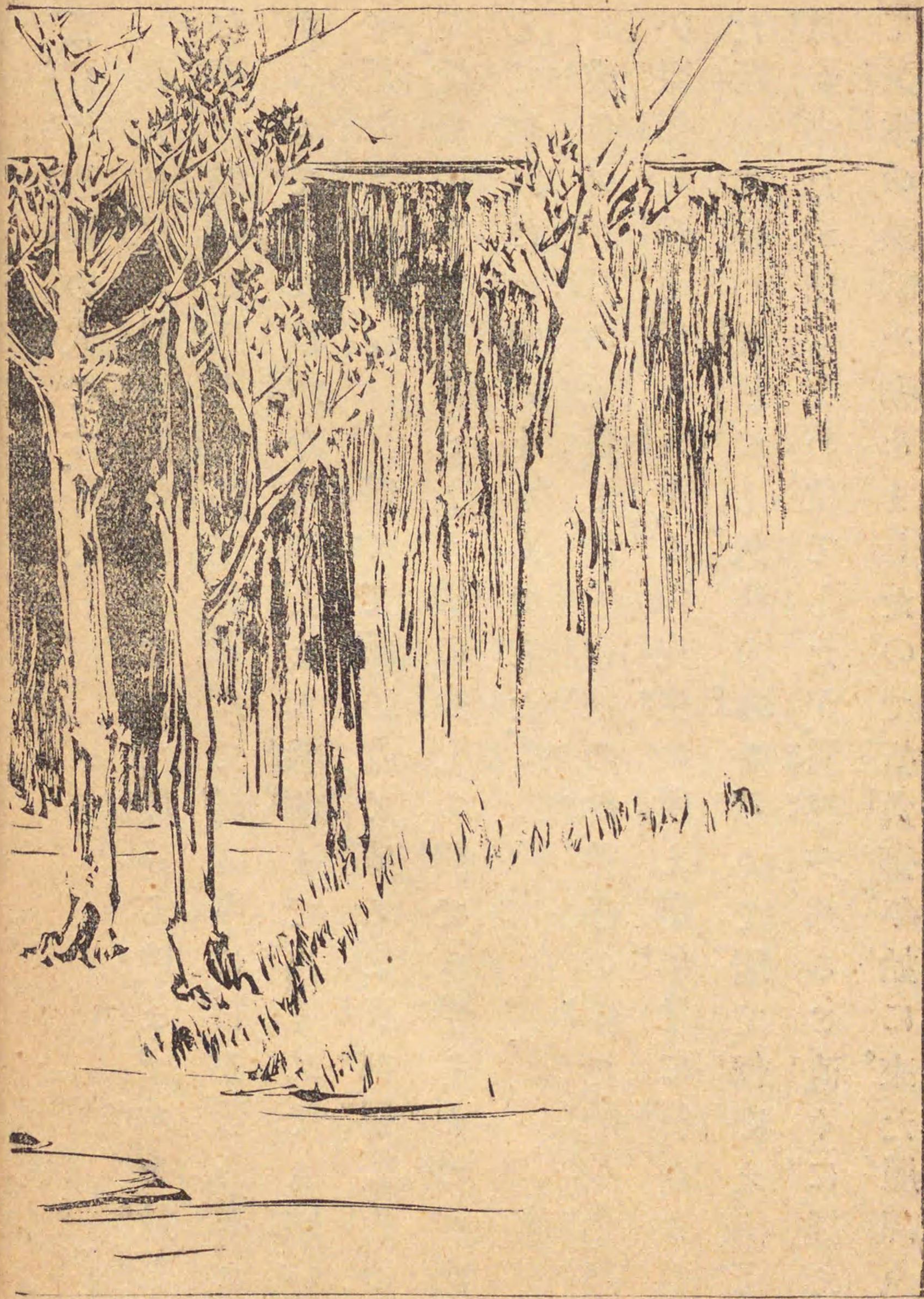
四 荻生徂徠の勤學

荻生徂徠云う先生わ、日本でも名高い大學者で、今から

二百年程前の人です。

此人わ又、大層學問の好きな人で、朝から晩まで、本を放し
た事が無いご云う位で、本を讀んで居る中に、日が段々暮れ
かゝつて來れば、本を持つたまゝ椽側まで出、それでも暗い
と戸外え出、いよゝ暗くて讀めなく成るご、又部屋え入つ
て、燈火の下で見ると云う様に、少しの間でも惜しがつて、決
して無駄にわ使いませんでした。

或年の正月の元日、これも徂徠の御弟子の中で、随分名高
い服部元喬云う人が、この先生の所え御年始に行きまし
た。所が先生わ元日でも矢張り本を讀んで居て、何處え御正
月が來たか知らない位でした。が、服部が來るご直ぐに捕え
て、又本の談話を初めましたので、折角御年始に來た服部も、



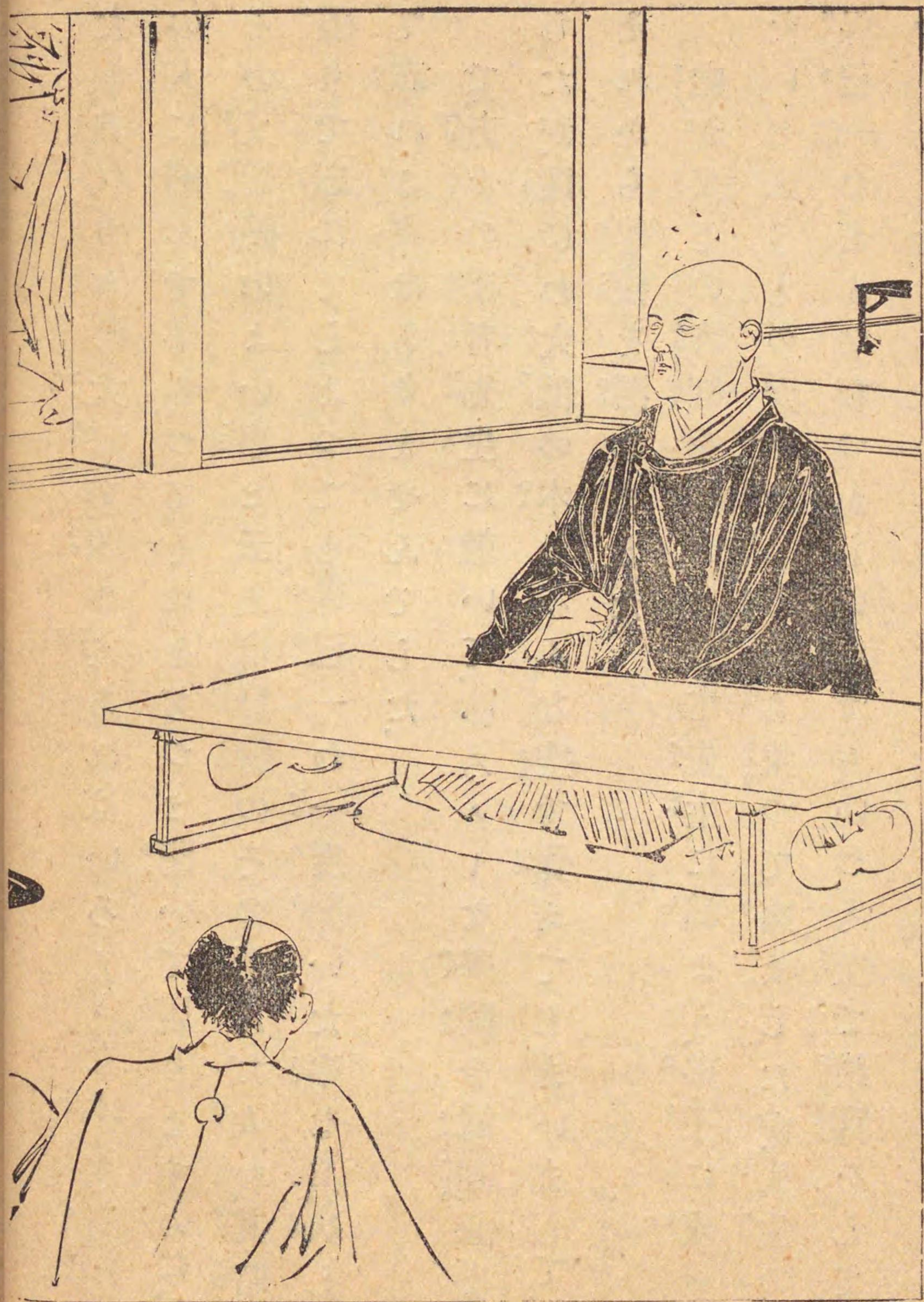
ついでその談話に釣り込まれて、さうく御年始の口上を、終
まで云う事が出来なかつたそうです。

五 塙保己一の學問

塙保己一

盲人と云えば、琴を弾くか、按摩をするか、他にわ藝の無い
ものと思つて居るのが、世間にわ大勢あるようです。
處がなかく、さうでありませぬ。中にも今から五十年ほ
ご前に居た塙保己一と云う人なごわ、盲人でもなかく、ご
うして、目明も敵わない位な豪い大學者でありました。
尤もこの人も、稚い時分にわ、矢張り他の盲人の子の様に、
琴や按摩を習つたのです。けれどもさう云う事わ、一體性に
合わなかつたものご見えまして、思ふ様に出來ませんでし

たが、其代り本わ大好て、間さえあればいろくな本を、目明
の人に讀んでもらつて、それをちつと聞いて居りますのに、
その又記憶のよい事と云えば、肝腎のその讀んだ人わ、其時
限りで忘れてしまつても、保己一わ一度聞いた事なら、決し
て忘れる事はありませんでした。
で、方々の學者先生に就いて、いろくな學問を勉強しま
したが、遂にわ大低の本わ、みんな空で覺えてしまひまして、
それから學校を開きました。
處が又、その評判を聞きまして、先生に爲よう、弟子に成り
たいと云うものが、四方八方から集つて來ましたが、先生の
保己一わ、ごんなむつかしい本でも、いつも空で講釋をして
やりました。



二六
するご或晩の事保己一わ例の通り弟子を大勢集めまし
て本の講釋をして居りますご生憎風が吹いて来て燭臺の
火を消しましたので弟子達わ驚いて「少々御待ち下ださい
まし。」如何したのだ？「只今燈火が消えましたからつけま
すまで御待ち下ださいまし。」ご云いますご保己一わ笑ひな
がら「あゝ目明わ不自由な者だ私なぞわ燈火が消えても本
が腹の中にあるから何時でもよく讀めるのに。」ご云いまし
たので弟子達わみんな頭を搔いて何ごも云えなかつたそ
うです。

この保己一わ後に檢校ご云う立派な位を貰いましたご、
この通り目が見えなくても自分の讀んだ本を三千七十部
集めまして群書類從ご云う日本一の大きな本を拵えまし

た。

六 山田長政の大志

黒田長政

日本わ今こそこの通り開けまして世界中の國々わ何處
でも行かれる様に成つて居ますが昔時わこの日本を出て
他の國え渡る事ご云う事わなかく容易な事わありま
せんでした。

其中で山田長政ご云う人わ日本を出て臺灣え行きそれ
から暹羅え押渡つてごうく其處の大將軍に成り遂にわ
王様の代りをして其國を治めてやつたご云う豪い人であ
りました。

此人わ初仁左工門ご云つて約らない武士でしたご元よ



此の勢に驚いて、近所の國々までもみんな降参してしま
いしましたから、さア暹羅の國と云うものわ、急に威勢が好く
なりました。

王様わ喜ぶまい事か！これも全く山田さんの御蔭だご
云うので、御禮にわ自分の娘を、長政の御嫁さんに遣りまし
て、其上領分を澤山呉れましたが、後にわまた、自分の代りに、
暹羅の國を治めさせましたので、茲でさうく、長政も暹羅
の王様同然に成つてしまいました。

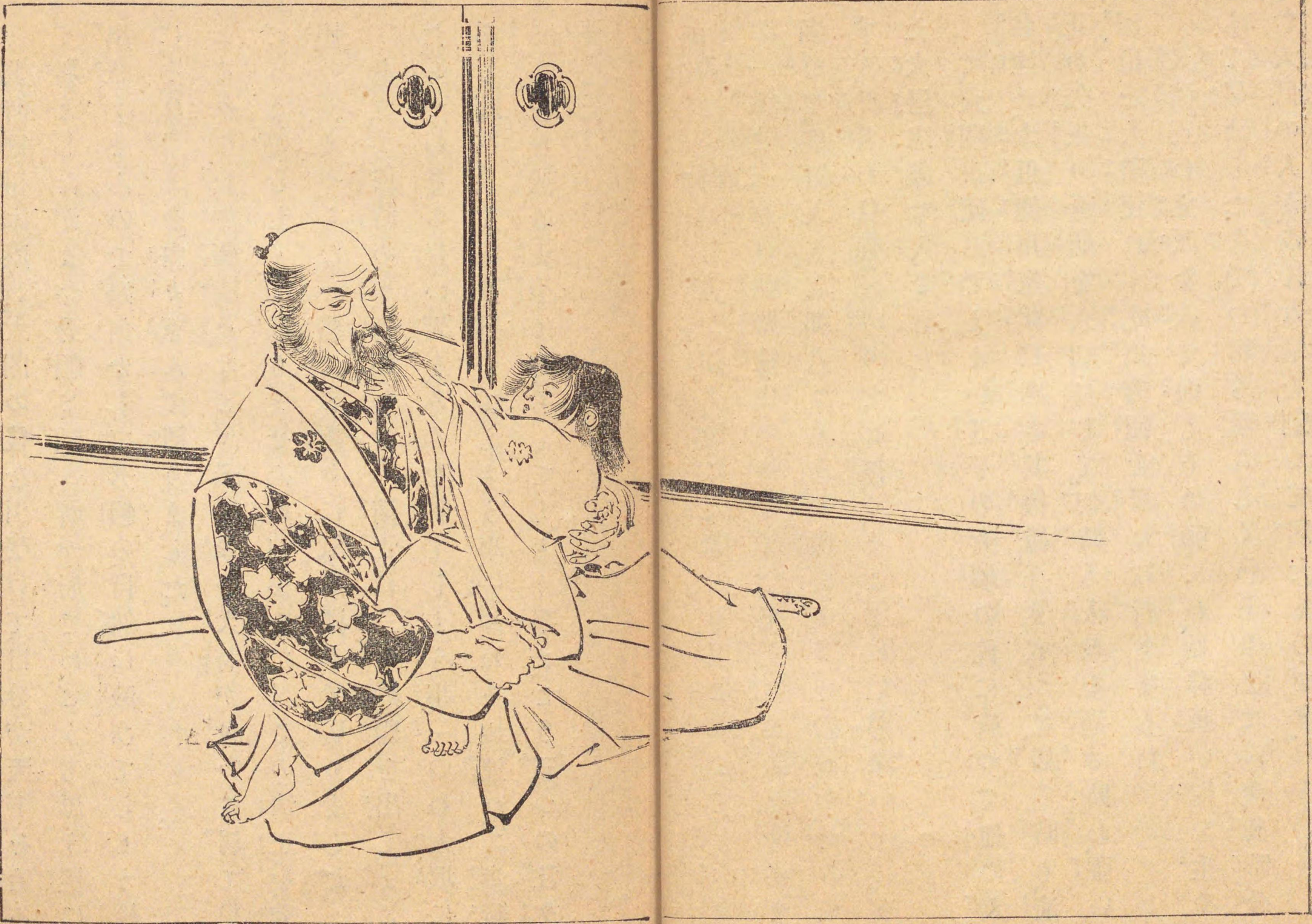
七 加藤清正の忠義

加藤清正と云えば、日本でも名代の軍人、誰も知らない者
わありません。

稚さい時から力が強く、後に太閤の下臣に成つて、七本槍
の一番と云われ、朝鮮征伐の時なごわ、鬼上官と云う渾名を
名けて、朝鮮人も支那人も、みんな慄え上つて、恐がつたので
すが、此人わ只強い斗りてわ無く、まここに仁慈深い上に、ま
た大層忠義な人でした。

で、太閤が死んでしま、其子の秀頼の代に成つて、他の大
名達わ、大低徳川家康に付き、其機嫌斗り取つて居る時も、清
正わ矢張り秀頼を大切にして、何時も大坂を通る時わ、強い
家臣を大勢連れて、吃度秀頼を尋ねに行きました。

又清正わ立派な人で、而もその願にわ、始終長い髯を生や
して居ました。今でわ髯も珍らしくわありませんが、其時分
わ大低の人が、みんな髯を剃つて居たものです。



其時徳川家康わ、太閤の後を引受けて、自分が天下を治めて居ましたが、まだ秀頼と云う者が居てわ、ごうも思う様に出来ませんので、如何かして秀頼の自然に滅びてしもう様に、それ斗りを内々望んで居りました。

それにわ加藤清正なごう云う、豪い大將が付いて居てわ、ごうも煙むたくて成りません。如何かして又この清正を、秀頼の側えやらない様に、頻りに氣を揉んで居りました。

其處で或時の事、家康わこの清正に、三の難題を出しました。一つわその長い髯を、みんな剃てしもう事、一つわ大坂にある邸を、早く取り拂つてしもう事、一つわその連れて歩く家臣を、成る丈少く減らしてしもう事、ごう三つの注文でした。

けれども清正わ、元より他の大名の様に、家康を恐がつて居ませんから、こんな注文わ一つも聞きません。第一にこの髯わ、清正の大切な髯で、戦争え出て具足を着、銅の面を被る時、面の動かない様に生やしたのだから、如何しても剃つてしもう事、出来ません。次に大坂の邸わ、太閤様え御奉公の時、わざと拵えた邸ですから、今取拂つてしもうてわ、太閤様え申分がありません。又家臣を大勢連れて歩行くのは、若し不意に戦争の初つた時、何時でも役に立つ様に、ごう云う、用心の爲めでありますから、これも減らす事、出来ません。ごう、ごう三つごう断つてしましました。

ごう云う風でありましたから、家康はいよく邪魔に思つて、ごうごう遂に清正に、毒を吞まして殺したと云います。

が眞實か虚構か解りません。

兎に角清正ご云う人わ、まここに忠義な人なので、まだ太閣の生きて居る時分、伏見に大地震がありました、太閣の居る城が散々に毀れました時、一番掛に飛んで行つて、獨で城を固めたご云います。

八 土井利勝の心掛

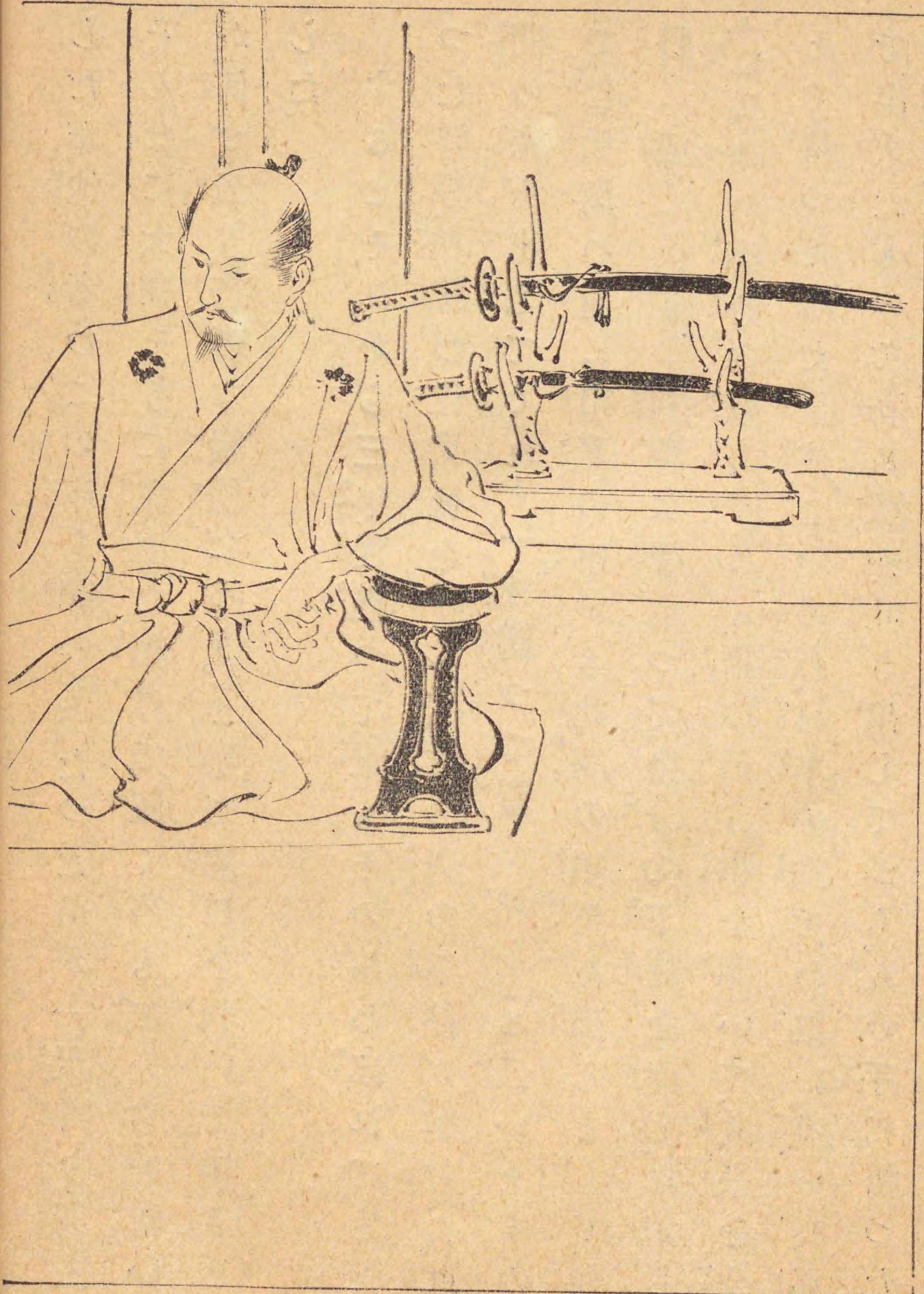
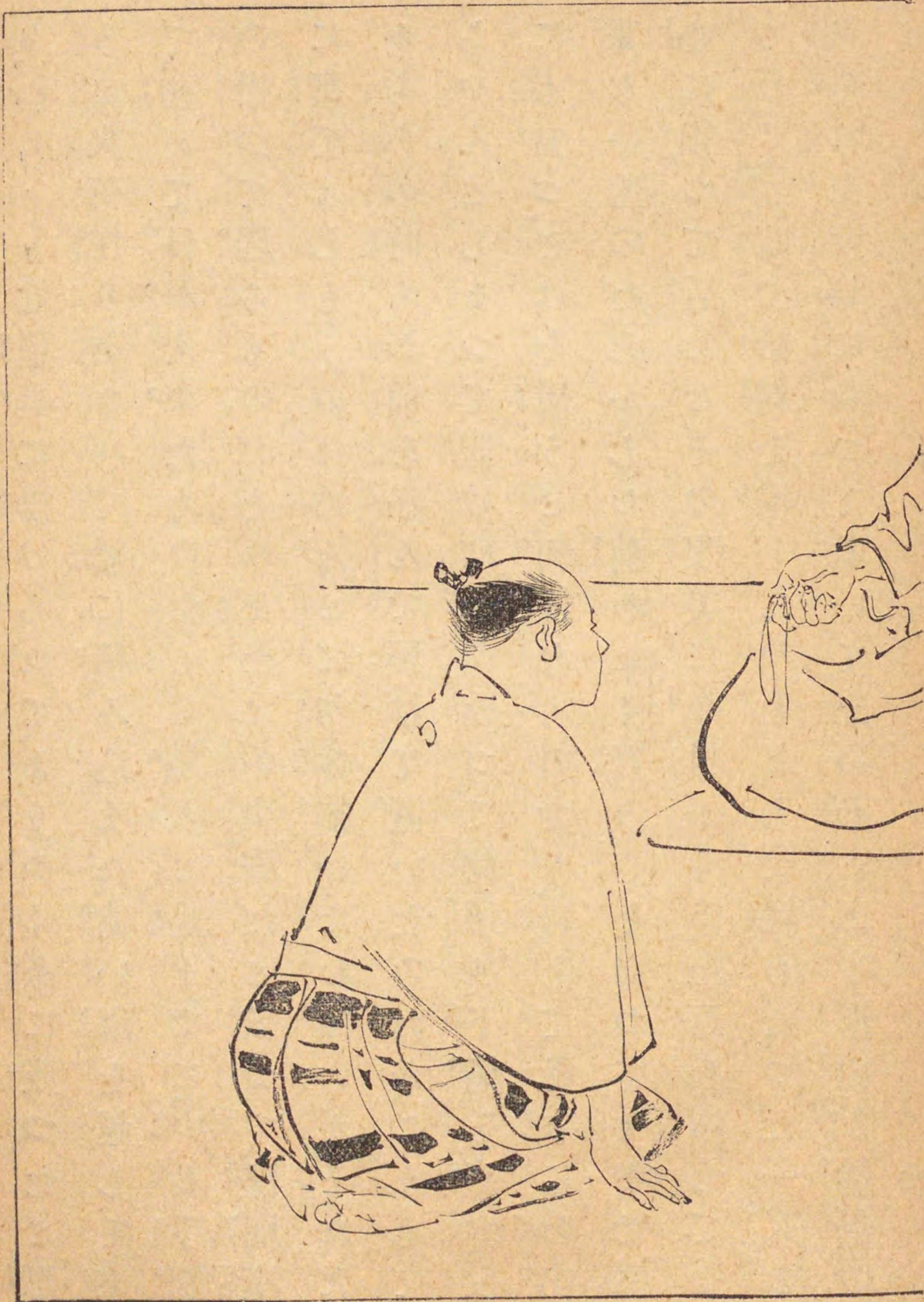
土井利勝

土井利勝ご云う人わ、徳川氏の家臣で、中々伶俐な大名でした。

或時此人わ、唐の絹糸を一尺斗り出して、家臣の大野仁兵衛を呼び、『これをお前に預けたから、よくしまつて置いてくれ。』ご云いました。仁兵衛わ畏まりましたして、其儘糸を預かりま

したが、他の者わこの事を聞いて、『たつた糸が一尺斗り、何もそんなに大切そうに、家臣に預けて置く事も無いぢや無いか。何ご云う吝嗇な殿様だらう。』ご陰で悪口を利いて居りました。

するごそれから三年程経つて、誰もその事わ忘れてしまつた時分、利勝わ仁兵衛を呼んで、『吾の刀の下緒が解けた。此間の糸を出してくれ！一寸繕つて置くから。』ご云いますので、仁兵衛わ直に巾着の中から、此間の絹糸を出しまして、利勝に渡します。利勝は受取つて、自分で下緒を直しながら、『仁兵衛わ感心な奴ぢや。よく吾の云う事を聞いて、此糸を今まで持つて居た。全体この糸わ、日本の物でわ無い、遠い支那で出来たもので、初め蠶が吐き出してから、人の手に掛つた



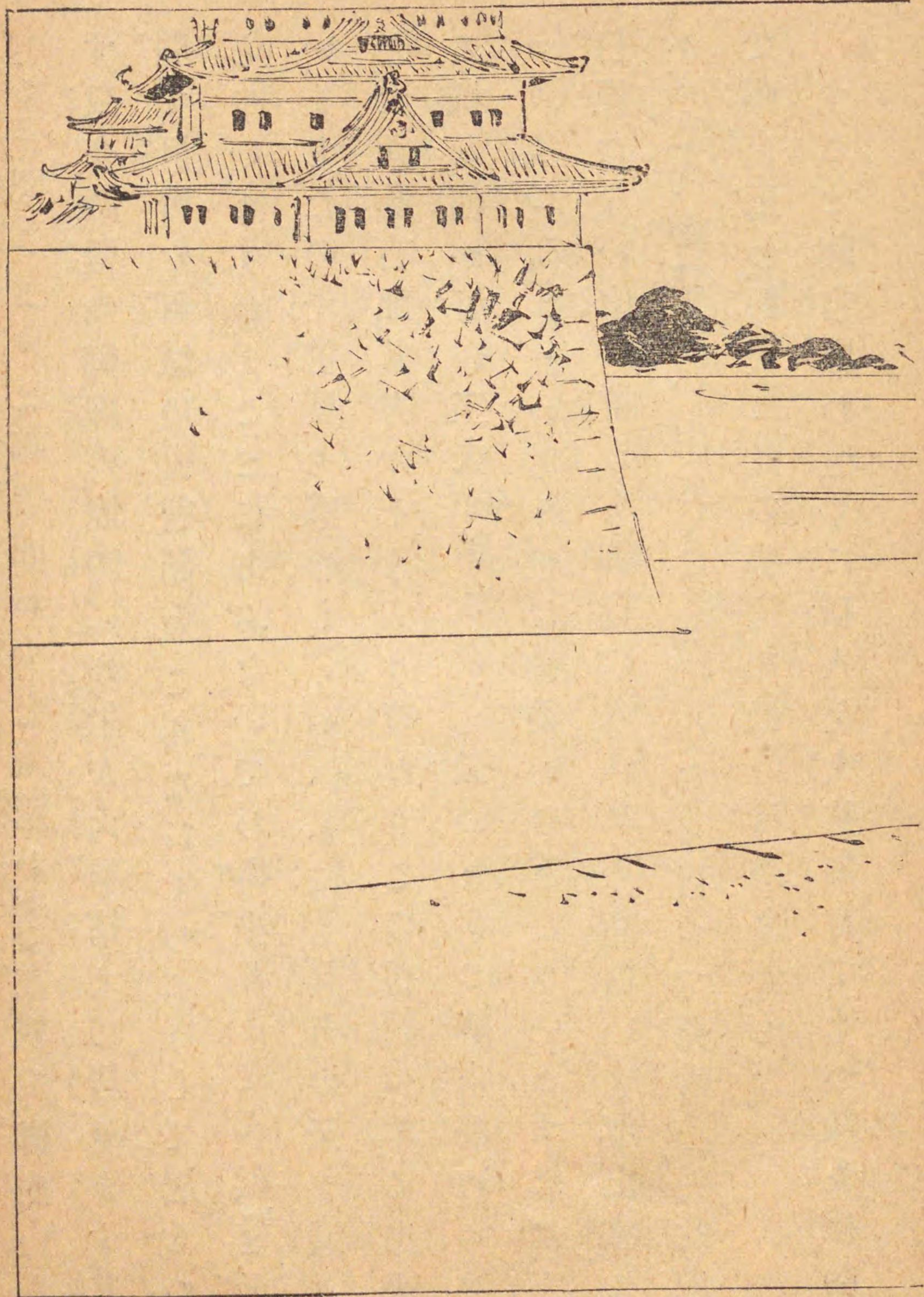
り、いろく、な道具に掛けられて、ようやく糸に成つたと思
う。又荷作りをされて船に積み込まれ、遠い海を越して來
て、初めて日本え來たものだ。して見る。是まで、中々手間
の掛つて居るものだ。それをたさい少許だ。云つて、塵同様
に棄てしもうのは、ほんこに勿体無いでわ無いか、それだ
からあの時も、お前を呼んで預けて置いたのだが、こうして
ちやんごしまつて置けば、今に成つて此通り、下緒を直す役
にも立つ、これを思う。ご何様なものでも、決して麓末にわ出
來ないものだ。しかしお前をよく吾の心を知つて、今まで感
心に預つて居たな。その褒美に今日からわ、三百石増してや
るぞ。』ご、一時に給料を増してやりました。元わ、たつた一尺の
糸、それを大切に取つて置いて、三百石と云う澤山な給料の

褒美にわ少しも惜しまない。云う、土井利勝の心掛、これが
何で吝嗇でありましようか。

九 木下藤吉郎の智慧

木下藤吉郎

豊臣太閤秀吉わ、日本一の豪傑で、此人の豪い談話わ、幾何
でもありませんが、中にもこの秀吉が、織田信長の家臣で、名も
木下藤吉郎と云つた時分の事です。
信長の居る清洲の城の堀が百間斗り壊れましたので、信
長わ家臣に云いつけて、この堀を直させました。が、仕事なく
づくして居りまして、一月たつてもまだ出來ません。其時
藤吉郎わ、この普請の様子を見て、『あゝあぶない。』ご、獨語
を云いました。から、信長わ聞き咎めて、『これ何があぶないの



だ？」と聞きます。藤吉郎わ少しも驚かず、左様で御坐います。只今殿様の御國の周圍にわ敵が大勢構えて居ります。其間で、肝腎な御城の御普請を、こんなにくづくして居らつしやいますわ。まここにあぶないでわ御坐りませんか、と云いましたので、信長も感心し、「うむ、いかにも其方の云う通りだ。だが藤吉郎、其方がそう云う位なら、この普請の早く出来る様な、何か好い工夫があるか。」と云います。藤吉郎わニツコリ笑つて、「それわもう、私に御委かせ下下さいませれば、三日経たない中に拵えて御覽に入れます。面白。吃度出来るか。」吃度御請合、い申します。そんなら行つて見ろ！」と、此處で藤吉郎わ新規に此の普請を云い付かりました。

する。藤吉郎わ直ぐに職人を大勢集めて、まづ散々御馳走をしてやり、それからみんなを十組に分け、その一組に十間宛あてがい、自分わ朝から側に附いて、みんなに精を出させましたから、仕事俄に撈取つて、一月でも直せなかつた塀が、たつた二日、出来上つてしましましたから、信長も肝を潰し、「成程、其方わ伶俐な奴ぢや。よく早く拵えてくれた。」と、殊の外喜びまして、褒美を澤山やり、又身分も引あげて、立派な士分にしてやりました。

今世間で普請をする時、人数を手分して掛るのわ、全くこの時の眞似をして居るので、こう云うのを割普請と云い、元わ太閤の發明したものです。

十 村上義光の忠義

村上彦四郎義光わ、大塔宮様に御供をして、吉野山へ逃げ込みました。

四八

其途中十津川と云う所で、芋瀬と云う者が出て来て、宮様を捕えようとしたが、宮様わ御自分の代りに、錦の御旗を御渡しに成つて、其間に先え御逃げに成りました。此時義光わ、少し後れて参りましたが、見るご今芋瀬の家臣共が、大切な錦の御旗を擔いで、歸つて行こうとするのを見ますご、「おのれ憎い土百姓奴。その御旗を何だと思ふ。貴様等の持てるものぢや無いぞ。」と云うが、早いか飛んで行つて、其家臣共を手當り次第に、片端から投げ付けて、譯無く御旗を取り返えし、直ぐに宮様の處へ來ましたが、その勢に肝を潰して、芋瀬ももう追駈けませんでした。

やがて吉野に立て籠りますご、間も無く賊が攻め込んて來ました。

其時義光わ、また直先に躍り出て、一生懸命に働きました。が、元より、賊わ大勢ですのに、宮様の人數わ少のう御在ますから、逆も戦争では敵わないと云うので、宮様に御勧め申し、そつと裏路から山を遁げさせ、其代りに宮様の鎧を今度は自分が着込みまして、城の櫓えかけ登り、「やア、賊軍共よく承われ！吾わ今上天皇の皇子、大塔宮護良であるぞ。武運拙く今此の處で、自害して相果てる。後日の手本によく見て置け！」と云う中に、もう腹を切り割き、腸を握み出して、彼方の壁へ投げ付けながら、ごうく死んでしましました。けれど、賊軍わ、御代身ごは知りません。矢張りこの義光



を眞個の宮様だと思ひまして、急いで其處へ来て首を斬り、
ごつごつ凱歌を揚げて歸つて行きましたから、其間に眞個の
宮様は無事に御遁に成る事が出来ました。
又この義光の子の村上義隆と云う人も、まことに忠義な人
なので、此時も阿父さんに云い付かつて、宮様の御供をして
遁げましたが、後に賊軍の追駈けて來た時、獨りで大勢を敵
手にして劇しく戦いました。揚句、身體中に創を受けて、こ
も助からないと思つたものですから、これもさうく腹を
切つて死にました。

十一 濱田彌兵衛の勇氣

濱田彌兵衛と云う人、長崎の人ですが、よく商船に乗つ

濱田彌兵衛

て、南洋の方へ渡つて行きますので、また其國々の言葉も出
來ました。

丁度其時分、長崎の代官の、末次米藏と云う人の船が、印度
へ行つた歸途、臺灣の側を通りますと、臺灣に居る和蘭人に、
悪い奴が居りまして、途中でこの船を捕えて、折角印度から
持つて來た品物を、残らず取りあげてしまひましたから、末
次も腹を立て、苟も日本人が、臺灣人に酷い目に遭つて品
物まで取り上げられたとあつて、この日本國の耻辱だか
ら、如何かしてこの仇を討ち、品物を取り返して來なけれ
ばならないが、如何したらいいだらうと、此事を彌兵衛に相
談しました。

すると彌兵衛は元より氣の強い男ですから、直ぐに引請

けて、「よろしい、そんなら私に御委かせ下下さい。私が行つて
吃度仇を討つてあげます。品物もみんな取返してあげます。」
と、是から急いで支度をして、弟の小左工門に息子の新藏を
連れ、其他の家臣と一所に、みんな百姓の風俗をして、やがて
臺灣へ出かけました。

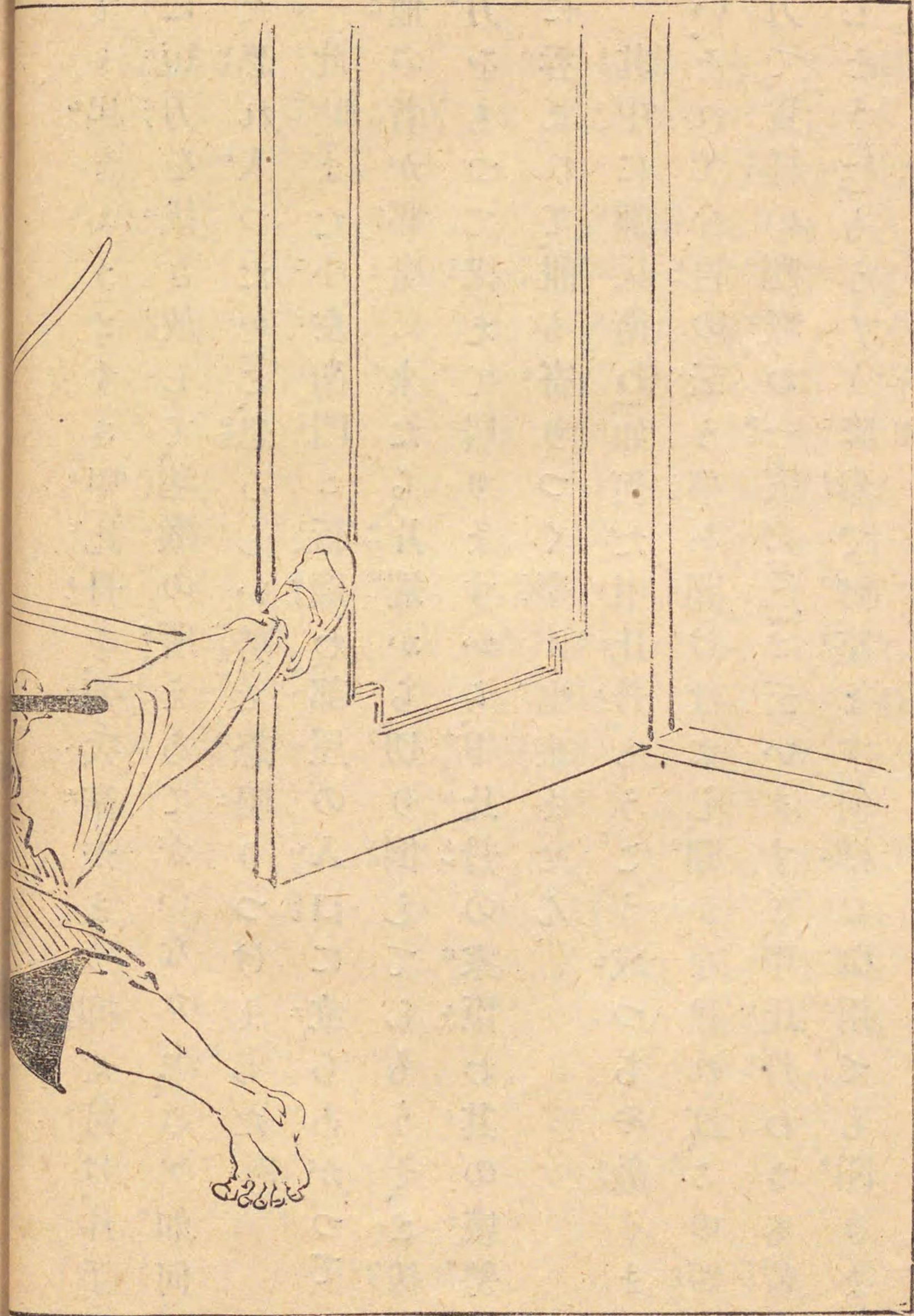
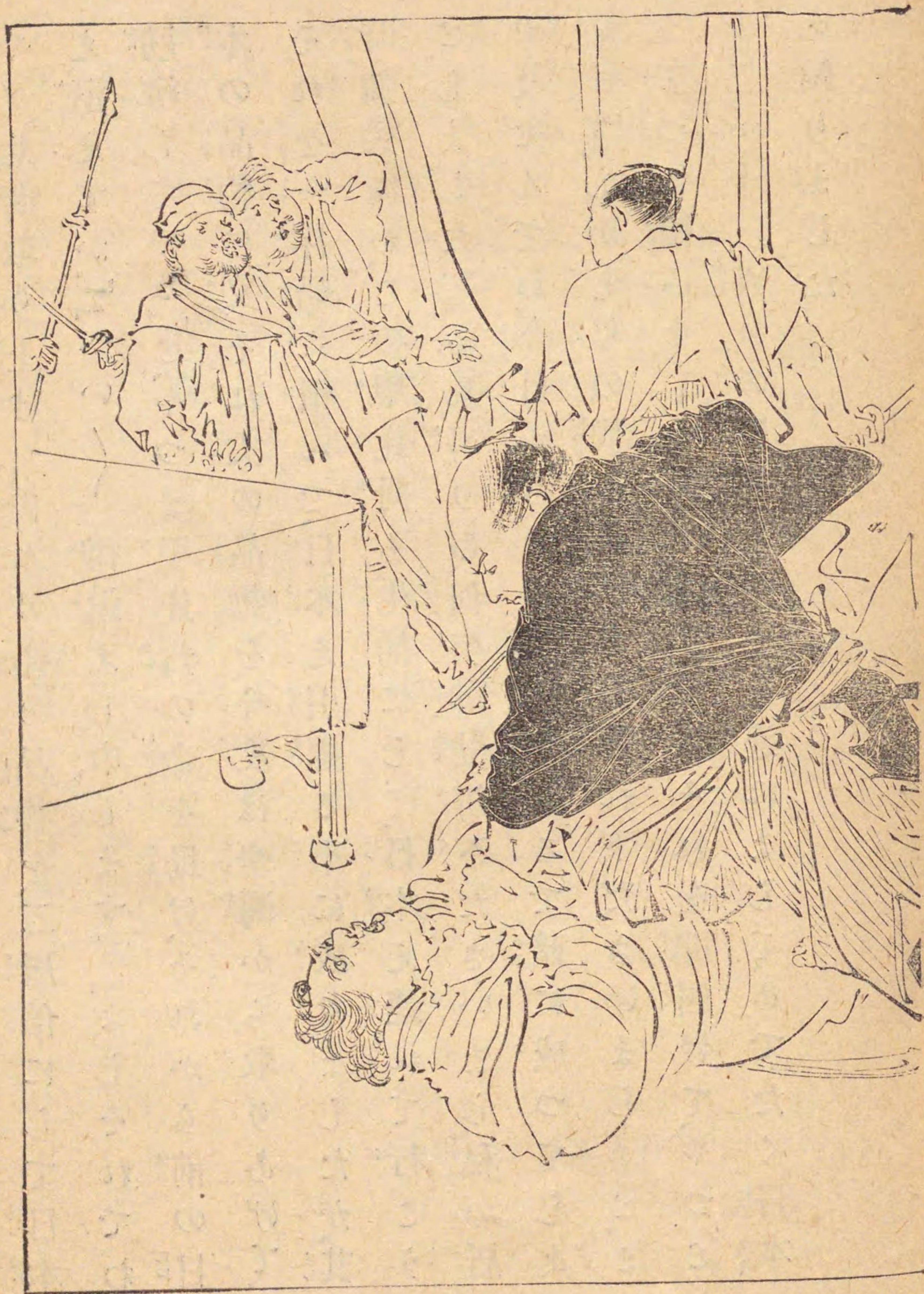
處が臺灣の方でも、初めわ用心して、急にみんなを上らせ
ませんでしたが、見れば人数も少なく、別に戦争の支度もし
て居ませんから、これならば大丈夫だろうと、漸う陸え上ら
せました。

其處で彌兵衛わ、小左工門と新藏と三人で、或日朝早く、ま
だ甲比丹(甲比丹)とわ臺灣人の頭の事です。の寝て居る中に、
其の家え不意に押かけ、突然寐床え踏み込んで行つて、周章

て、起きようとする甲比丹を、彌兵衛がまづ押え付け、片手
に短刀を抜き放して、咽喉の所えあてがいなから、「さア如何
だ恐れ入つたか」と、恐ろしい勢で怒鳴りつけました。

此時また小左衛門と新藏わ、部屋の入口に立ちあがつて、
他の者が邪魔に來たら、片端から切り倒してしもうぞ、と拔
刀をもつて構えて居りますから、甲比丹の家臣わ其の威勢
に呑まれて、誰も寄りつく事が出来ません。

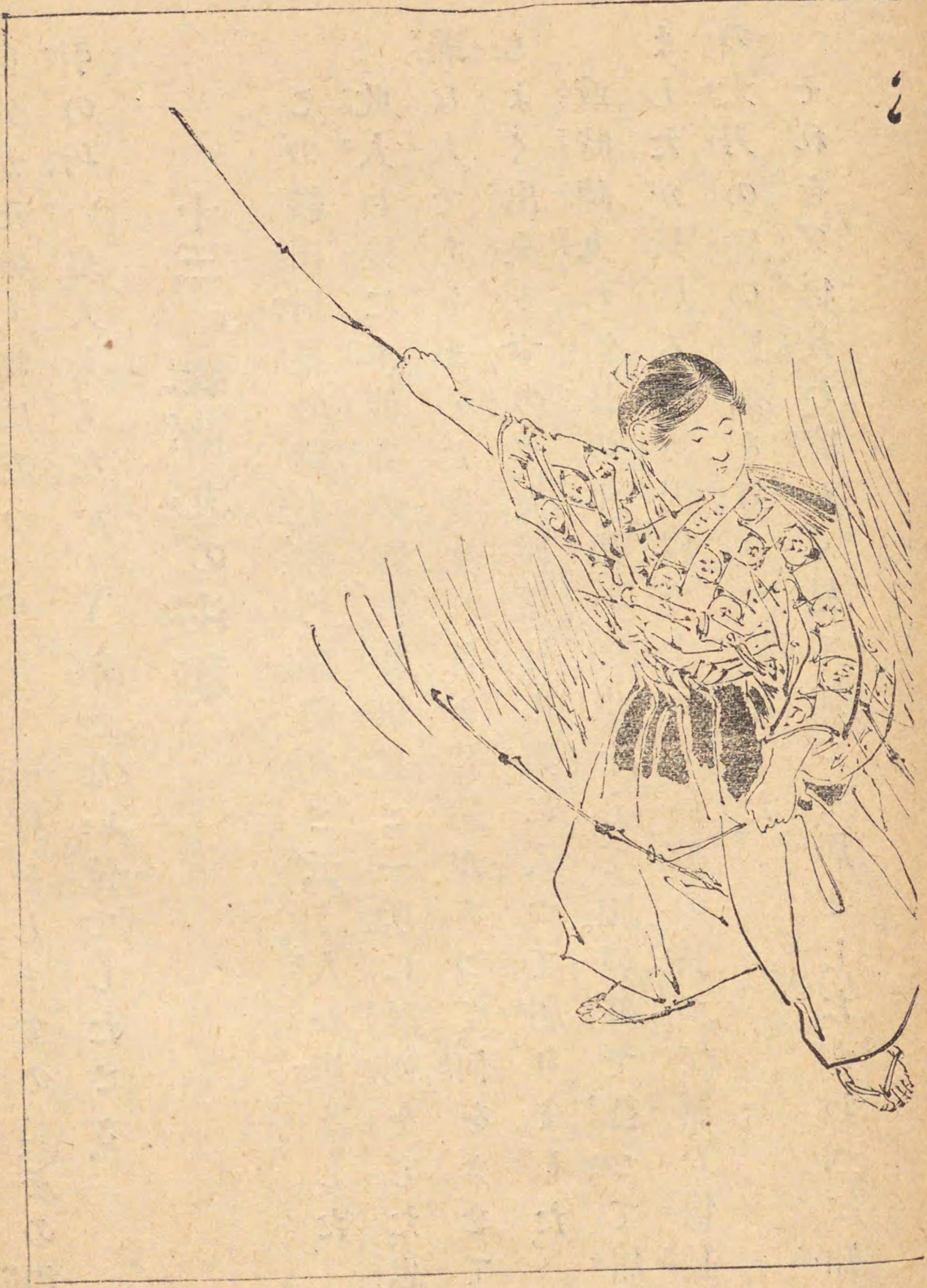
其中に彌兵衛わ「如何だ甲比丹。もうこう成つちや敵うま
い。それで今吾の云う事を聞けばよし、聞かなければ、この短
刀で、貴様の咽喉わ一突だぞ。」と云いますと、甲比丹わさも苦
しそうに、「もう、降参で御座ます。何様な御用でも聞きま
すから、さ、さうか、命斗りわ御助け下さいまし！」『それち



五八
やア此間取り上げた、日本の船の品物を、二層倍にして日本
え返えすか。』へい。御返えし申します。』よしそれでわ
勘辨してやる。』と、やつと甲比丹の命を助け、それから前の日
本の品物に、又それ丈の品物を、今度は臺灣から取りあげて、
それを一掴船に積んで、日本へ引揚る事に成りましたが、其
時彌兵衛わ、この甲比丹も生捕にして、日本へ連れて行こう
ごしました。が、『それ斗りわ、何卒御勘辨下下さいまし。私か居
りません。で、今日からこの臺灣が、まるで暗に成つてしま
います。しかし私の代に、息子を御連れ下下さいまし。』と、こ
う云つて頼みましたので、彌兵衛もそれを聞届けて、やつと
十二か十三斗りの甲比丹の子を連れまして、めでたく日本
へ歸りました。

十二 織田信長の戦争事

五月の御節句に、わ、鯉の幟を立てたり、柏餅を拵えて、今で
も御祝をしますが、昔わもつと盛なもので、殊にこの御節句
わ男の子の御節句です。から、武士の子と云うものわ、吃度此
日に大勢集つて、戦争事をして遊んだものです。
あの名高い大將織田信長の稚い時分も、丁度此御節句に
阿母さんに御金を貰いました。が、普通の小兒なら、直ぐにそ
れで玩器を買う。が、又御菓子でも買つてしもうのです。が、
信長わそんな事わしません。
まづ此の御金を少し宛分けて、これを近所の小兒に遣つ
て、みんな自分の配下に爲、それから例の戦争をしましたが



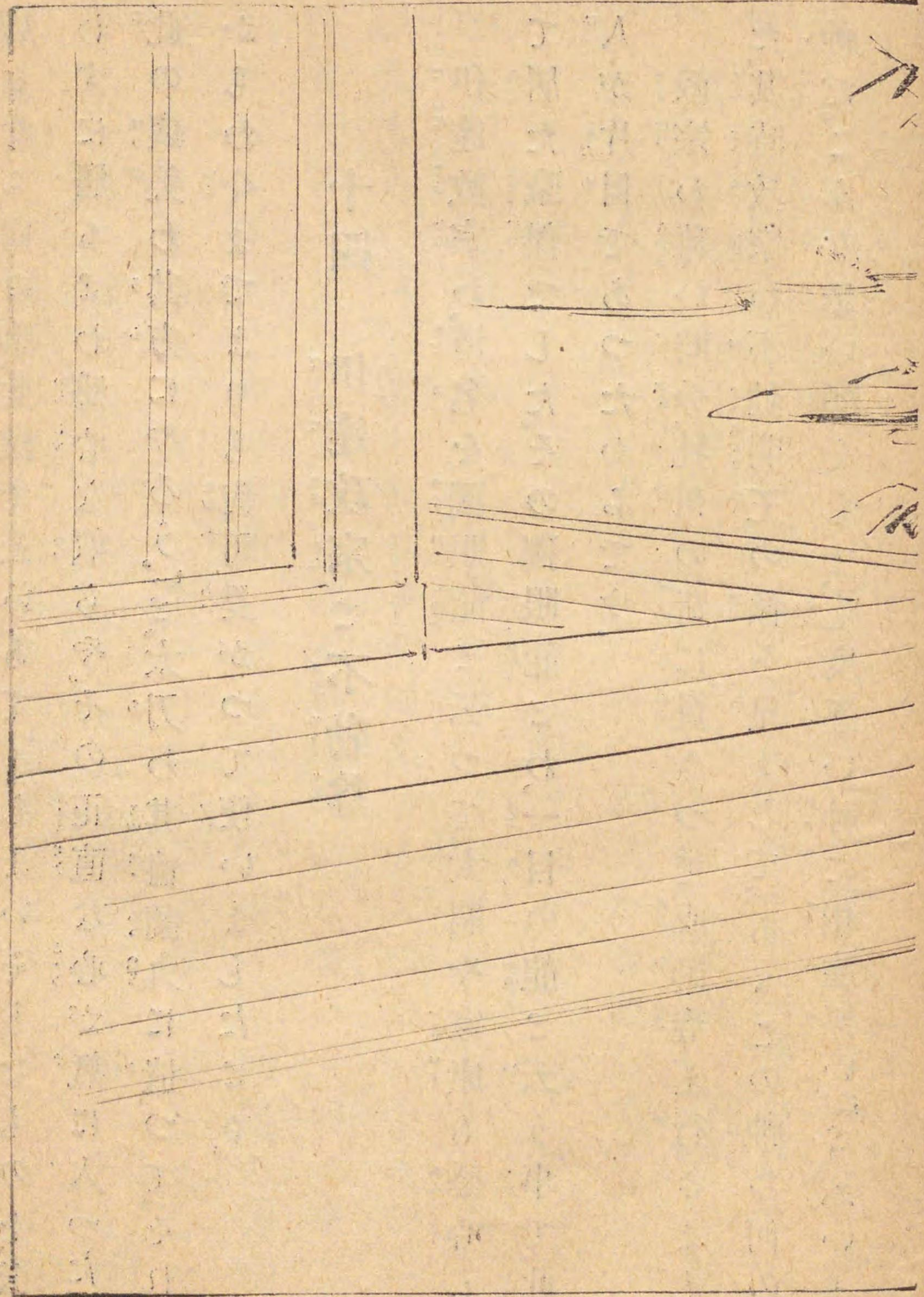
六二
自分がその大將に成つて、兩方の指揮をしますのに、その掛引の巧い事、大人もなかく敵わない位でしたさ。

十三 森蘭丸の注意

森蘭丸

この織田信長の御小姓に、森蘭丸と云う人が居ました。此人は後に本能寺の戦の時、信長と一所に討死をした、忠義な人でありました。が、生れ付き智慧があつて、何をさせてもよく出来ますので、大層信長の氣に入つて居りました。或時蘭丸は、信長の小用の御供をして、厠の外で待つて居ました。が、只居るのも退屈ですから、自分の持つて居た信長の太刀の鞘の彫刻を算えて居りました。それを又信長は、窓から見て知つて居ましたが、わざと知りませぬ。

六三
らない風をして出てしまひ、それから幾日も経つてから、他の小姓も大勢呼んで、ごうだ。お前達、この刀の彫刻が幾何あるかあてゝ見ろ！。若し巧く當てる者があつたら、褒美にこの刀をやるぞ。』と云います。小姓共は一生懸命に成つて、やれ十の、二十の、各自に出鱈目を云いました。が、誰一人當たりませぬ。其時蘭丸は、何思つたか初から黙つた限り何とも云いません。から、信長は不思議に思つて、『これ蘭丸、其方は何故何も云はんか、早くこれを當てゝ見ろ！』と云います。蘭丸は静かに、『へい、實わその彫刻の数、私此間算えまして、よく存じて居りますから、それでわざと申しませんでした。』と云いました。ので、信長は手を拍つて、『あゝ其方、感心な奴ぢや。知つて



居るなら尙の事、此處で云いあてししまいそりなものを云
わすに居るごわ感心な奴ぢや。その正直な心が氣に入つた。
此の褒美わ其方にやろう。』と、太刀わ其儘蘭丸に遣つて、それ
からわ今までよりも尙可愛がつて使いましたさ。

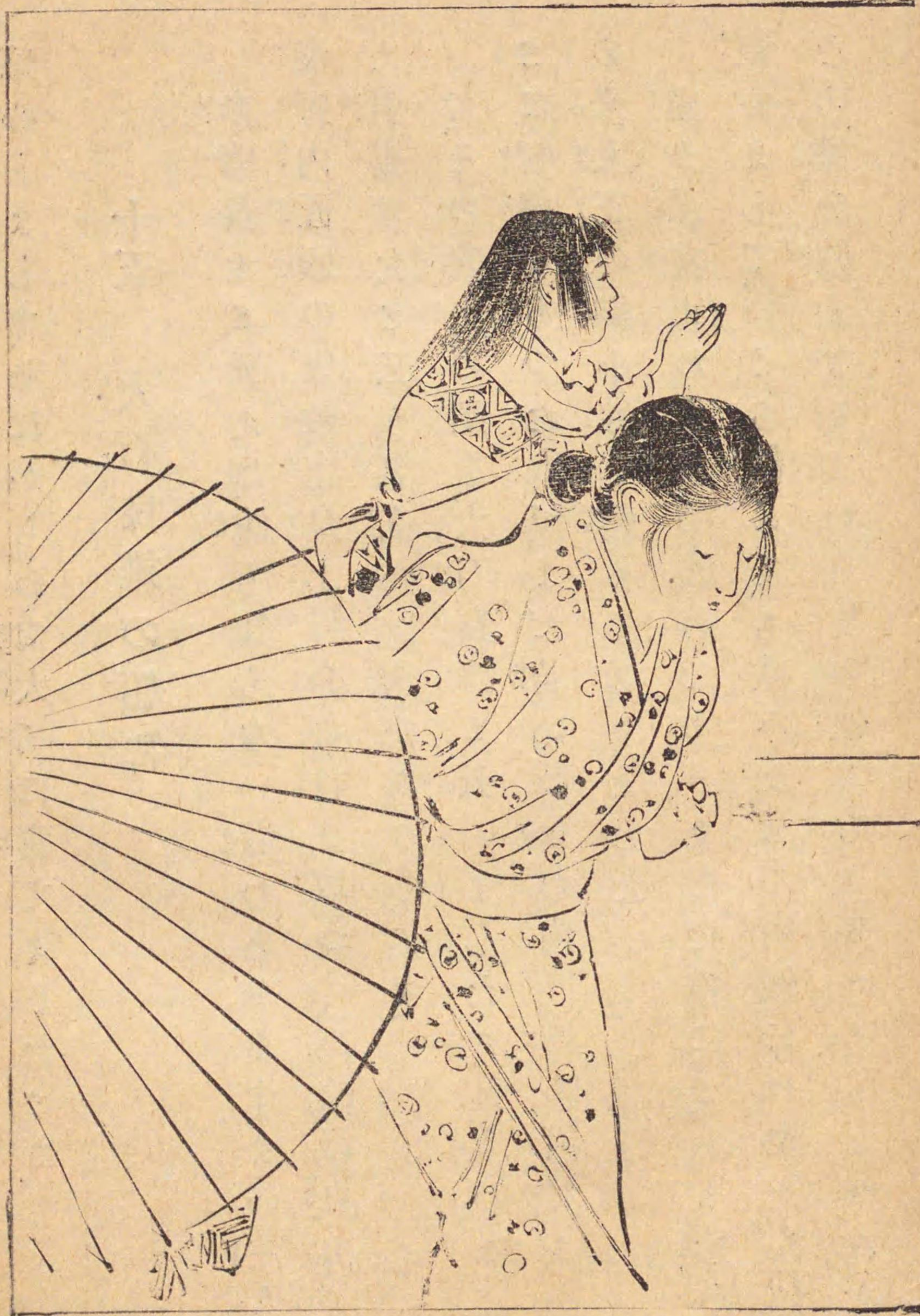
十四 伊達政宗と不動尊

伊達政宗わ、渾名を獨眼龍と云つて、太閤や家康も、感心し
て居た豪傑でした。その獨眼龍とわ、一目の龍と云う事で、此
人が片目であつたからです。

政宗わ稚い時分、乳母の背に負さつて、或御寺へ行きました
た。其時政宗わ不動明王の像を見まして、『あゝこの神わ何の
神だ。こんな恐い顔をして、吃度悪い神に相違無い。』と云いま

伊達政宗

す。乳母わ頭を振つて、『いゝえ、そうでわ御在ません。この神
様わ不動様と云つて御顔こそ恐う御在ますが、御心わまと
に優しくて、人の難儀を御救い下さる、御慈悲深い神様で御
在ます。』と云つて聞かせましたから、政宗わ感心して、『おゝそ
んな善い神様なのか、ほんごに大將と云うものわ、この不動
様の様に、外見わ恐くても、心わ優しくしななければいけない、
威光もあれば慈悲もあるのが、ほんごの大將と云うものだ。
吾も大きくなつたらば、この不動様の様な、豪い大將に成ら
うや。あゝ、今日わ善い事聞いた。これも矢張り不動様の御利
益だらう。』と、今度わ其前で手を合せて丁寧に拜みました
ので、一所に行つた乳母も、『なんご云う御發明な事だらう。今
に吃度この若様わ豪い大將に御成り遊ばすだらう。』と、大層



感心しまして、それからわ尙大切に育てましたこと。

十五 大石良雄の頓智

大石良雄

赤穂義士云えば、誰も知らない者わありますまい。主人、浅野内匠頭の仇敵、吉良上野介の首を取つて、高輪の泉岳寺へ引揚げたこと云う、名高い談話があるのです。

で、その義士の頭を、大石良雄云いました。此人わまことに智慧のあつた人で、まだ若い時分わ、内匠頭の阿父さんの采女正の御小姓を勤めて居りました。

處が采女正わ、至つて病身でありましたのに、ごうも薬を嫌ひまして、いくら勸めても飲みません。病氣にわ薬が大切、その薬を飲まなくてわ、身体の快くなる理がありませんか。

ら、家臣達わみんな心配して居ります。ご良雄わやがて好い工夫を考え、或日わざと采女正にからかい、「恐れながら殿様もそんな御病氣の御身体でわ、いくら御立服に成りまして、この私を御手討には出来ませぬ。いや、そんな糸の様な御腕でわ、ごても御刀わ抜けますまい。」など、散々悪口を云いました。

するご采女正わ、火の様に腹を立て、「おのれ家臣の分際で、主人に向つて悪態を云うごわ、憎くい小僧奴、其處動くな！」と云いながら、刀を抜き、良雄に切つてかゝりました。

此方わ元より覺悟して居ますから、直ぐにヒヨイと飛び退いて、「おや、感心に御刀が抜けましたか。それでわ御手討に遊ばして御覽なさい！」と云いながら、御庭へ逃げ出します。



「采女正わいよく怒つて、おのれ逃げるごて逃がそうか。」
 「又續いて追駈けます。良雄わ又遠くえ逃げて、いやその御
 足でわ捕まりませんよ。……」なにを小癪な！「ごつこい、まだ
 く。」右え脱け左え退きますのを、一生懸命に成つて追駈
 けましたが、此方わ病氣で弱つて居る身体、先方わ丈夫な若
 者ですから、逆も捕える事わ出来ません。其中にわ足が疲れ、
 息が切れて、もう動く事も出来無くなりましたので、流石の
 采女正も我慢が出来ず、椽側にへたばつて、「水をくれ、水をく
 れ！」と云いました。

それを見て良雄わ、直ぐに御腕え御薬を入れて、其側え持
 つて行きました。が、采女正わもう苦しくつて、眼も眩んで居
 る時です。から、その御腕を取るが早いか、ぐつと一息に飲み

ましたら、それわ水と思いの外、平常から嫌いでく一滴も
 飲まなかつた御薬でした。

するご良雄わ初めて采女正の前え出て、「殿様！これで私
 の願も叶いました。此上わ只今まで御意に逆らい、御機嫌を
 損じました大罪人、何卒御手討に遊ばして下下さいまし。」ご、
 素直に首を出して畏まりましたので、采女正わ初めて氣が
 付き、「は、ア、さてわ吾の薬嫌を心配して、其方わわざと吾に
 逆らい、計畧を以て薬を飲ましたのだな。それほごまでに吾
 の事を案じてくれるか。あゝ難有い、嬉しいぞ。」ご、御手討にす
 るごころか、却つて良雄の手を取つて、その親切の御禮を云
 いましたとさ。



十六 上杉謙信の度胸

上杉謙信と云えば、日本でも名代の大将、而も戦の名人で
 した。
 稚い時分の名わ、猿松々々、と云われて居ましたが、中々手
 に負えない腕白者で、阿父さんの言う事さえ聞きませんの
 で、阿父さんも腹を立て、いつそ坊主にしてしまおうと、近
 所の御寺へ預けましたが、猿松わ坊主なんぞ大嫌ですから、
 ちつとも御經わ習いません。矢張り毎日戸外へ出て、近所の
 小兒の餓鬼大将に成つて、戦争事斗りして居ますので、お寺
 の和尚さんも持て餘して、又阿父さんの處へ返えした位で
 す。

此人が十一の時でした。阿父さんわ謀反人と戦をして、こ
 うく討死しましたので、自分で行つて仇を討とうとしま
 したが、家臣に止められて仕方が無く、ひこまづ城を逃げ出
 しました。しかし途中で敵に見付かると、直ぐ捕つて殺され
 ますから、家臣も大層心配しまして、晝間の中わこの猿松を、
 汚い椽の下へ隠して置き、さて夜に成つてから出そうとし
 ます。猿松わ一向平氣で、グウ／＼寐込んで居りました。普
 通の小兒なら、戦の最中の事でも、恐くてブル／＼慄え
 て居るか、それとも泣いて、ぐも居る處を、平氣で寐て居る度
 胸の好きさ！家臣もこれにわ感心してしまつたそうです。
 それからやつと起して、又其處から逃げ出す時、高い山の
 上を通りました。すると猿松わ、家臣の脊に負ぶさりながら、



遙かに城の方を見おろして、さも悔しそくに切齒をしながら、「今に見ろ、吾が吃度取返えしてやるぞ。其時わ此の山の上で、敵の逃げるのを見てやらなければ……」と云つて暫らく睨んで居ました。

十七 徳川家光の大書

徳川家光

家光わ家康の孫で、徳川家の三代將軍です。此人わまだ竹千代云つた小兒の時分から、大層武張つて、氣の強い人でした。が、一寸手習をするのにも、大きな字を書くのが大好でした。

或時阿父さんの秀忠二代將軍が、大きな紙を一枚出して、「竹千代！これにお前の好きな字を、何でも一字書いて見ろ！」

と云いました。

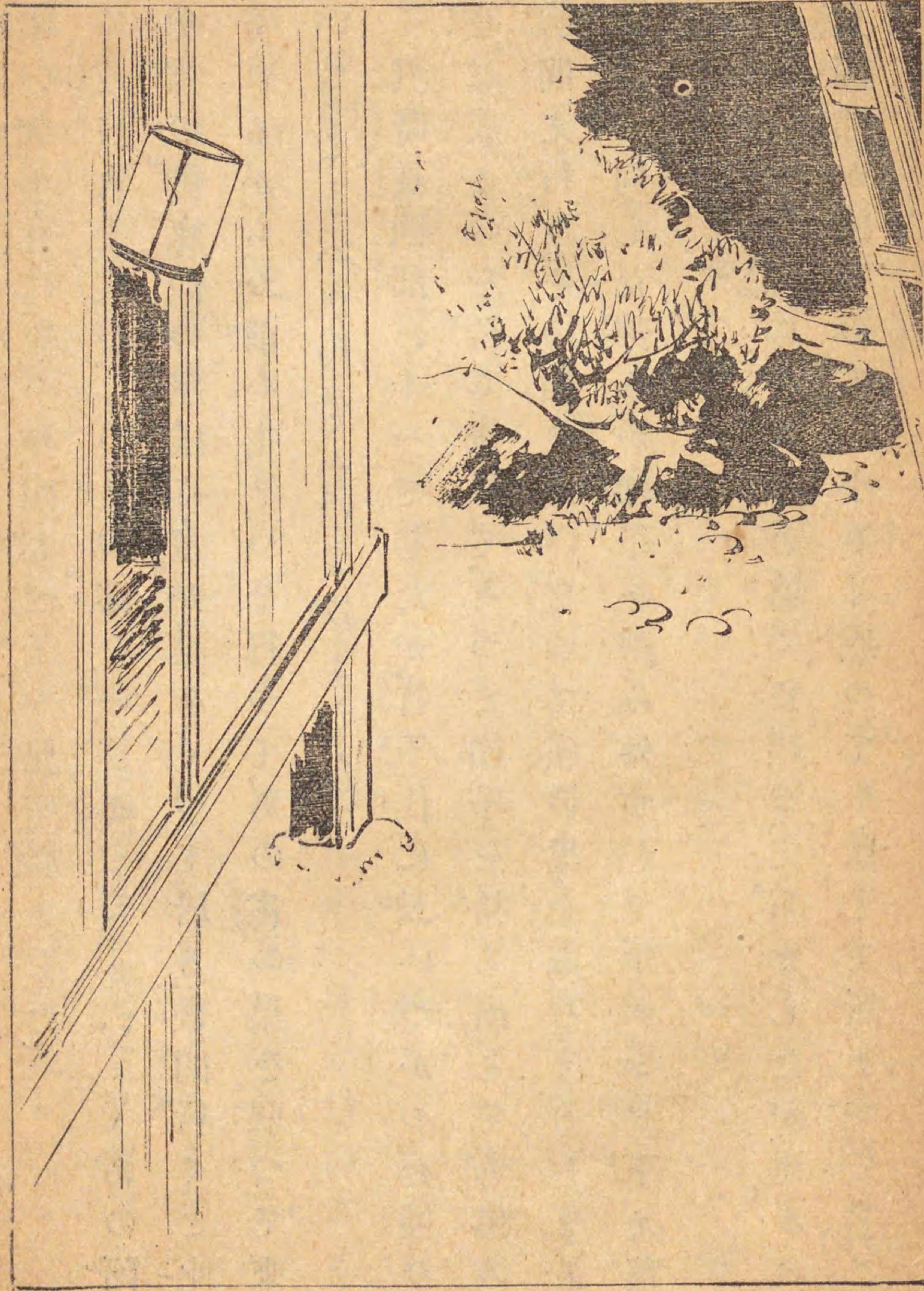
するに竹千代わ大喜悦で、直ぐ太い筆を持って、その大きな紙の上え、龍と云う字を書き初めました。が、あまり大きき書きましたので、遂に點の打ち所が無くなりました。

けれども竹千代わ、少しも遠慮わして居ません。突然紙の外の上え、大きな點を打ちましたので、「これわ若様、何を遊ばす。」と家臣達わ吃驚しました。が、秀忠わ少しも叱らず、「面白く、其の勢が無くてわ成らん。」と、大層其氣象を賞めました。

十八 松平信綱の忠魂

松平信綱

この三代將軍の、矢張り竹千代と云つて居た時分です。御



附の御小姓に、松平長四郎と云う兒が居ました。

或日竹千代わ、この長四郎を呼びまして、「おい／＼あの阿父様の御寐間の屋根に、雀が巢をくつて居る。晝間行くぞ叱られるから、お前今夜そつと行つて、あの雀の巢を取つて来い。」と、こつ云う用を云いつけました。

其時長四郎わ十一でしたが、竹千代に云いつかつた通り、夜に成るのを待ち兼ねて、そつと梯子を持ち出して、秀忠の寐間え行き、その廂え這い登つて、雀の巢を取ろうとしました。たが、如何した弾みか梯子を踏み外つしてドタンと下え落ちました。

其物音に驚いて、秀忠わ直ぐに起きて来ましたが、見るに長四郎が梯子の下に小さく成つて平伏して居ますから、「こ

りや、其方わ今頃何しに來たか」と、聞くに、「へい。この御屋根に雀の巢が御在ますのを、晝間私わ見付けまして、欲しくてほしくてたまりませんから、それで今晩取りに參つたので御在ます。」と云いました。が、秀忠わ、「いや、それわ御前が欲しいのであるまい。誰かお前に云いつけたらう。」と、竹千代の事を當てましたが、長四郎わ頭を振つて、「決して左様でわ御在ません。全く私が欲しう御在ましたので、それで獨りで參つたので御在ます。」と云い張つて聞きませんから、秀忠わわざと怒つて、「い／＼や、いくら其方がそう云つても、是わ誰かに云いつかつたに相違無い。夫を白状しない中わ、どうしても勘辨する事わ成らんぞ。」と、こつ／＼この長四郎を大きな囊の中へ入れて、翌朝まで縛つて置き、もう弱つて白状するだらう

八八
ご、父長四郎を責まして「事實の事を云え！」と云いましたが、如何しても長四郎わ、竹千代の事を云いません、其中に奥方も出て来て長四郎を可哀そうに思召し、小供だから堪忍して御遣り遊ばせ！」と傍から執成しましたので、秀忠も仕方が無く、長四郎を免して歸えしましたが、後で奥方に向つて、「いや實に感心な子だ。竹千代に頼まれたのに相違無のだが、さう云つてわ主人の科になると思つて、いくら責めても白状せず、罪を自分に被つてしもうこわ、小供に似合わぬ忠義な奴ぢや。あゝ云う忠義な家臣が居れば、竹千代も安心なものぢや。」と大層賞めて話したそうです。

案の定此長四郎わ、後に松平信綱と云つて、三代將軍の家臣の中でも、一番大切な人に成りました。

第 壹 編
日 本 本 史 歷

巖谷漣山人編

日本歴史！何ぞ其名の陳腐なる。幼年
讀本！何ぞ其名の斬新なる。この斬新
なる幼年讀本は、其斬新なる筆鋒を以
て、彼の陳腐なる名の下に、陳腐なる
材料を編纂す。僅か百六拾頁の内を以
て、よく三千年の事歴を叙し、三歳の
童子をして尙且つ我邦の國體を詳かに
せしむ。所謂故を温ねて新を知るとは、
夫れ是の謂乎。

梶田半古君畫



巖谷漣山人編

第二編 日本地理

ひかしく、費長房と云ふ仙人は、
千里の途を一尺に縮めたやうに。
今漣山人は、日本六拾餘州をば、僅
に百五十頁の小冊にまとめて、而
かも山川の大、都鄙の多き、一つも
漏れた所が無い。若し夫れ、父母の
膝に抱かれながら、京大阪の夢を
見んと思ふお子達、子守の背に負
はれつゝ、蝦夷臺灣に遊ばんと思ふ
坊ちゃん、宜しく先づ此書に就い
て、日本地理を知り給へと白す。

水野年方君畫



第 參 編
世 界 本 史 歷

巖谷漣山人編

世界萬國、開闢茲に一萬年
ならんこす。其間の出來事、
僅に百五十頁以内にて、
大要漏す所なく、而も行文
の平易なる、三尺の童子猶
解すべく、一氣讀去れば一
萬年間の事跡、眼前に歴然
たり、是作者が苦心の存す
る所にして、又作者が特有
の技能とす。

中村不折君畫

第 六 編
全 壹 冊
世 界 立 志 談

巖谷漣山人編

例の最も簡易なるお伽的文体を以
て世界各國の地理を説けるものは
即ち本書である、凡そ有名なる山
や、河や、湖や、都は勿論のこと
如何なるとでも兎に角世界に名高
へものは一つも漏す所がなく、能
く順を追ひて幼年諸君にも一度此
の本を讀めば坐ながら世界を周航
するの感あらしむるは本書であ
るのです、だから英吉利や佛蘭西
の事を知りたへ諸君は一本を御購
讀あれ。

渡邊金秋君畫

第 五 編
全 壹 冊
日 本 立 志 談

櫻井鷗村君 述

世界冒險譚

每月一回 每編讀切

世界冒險譚 第一編

金堀少年

金堀少年は陸上の冒險譚である。金堀少年は少年の一團隊が險を冒し難を衝いて砂金採取に出掛けた譚だ。金堀少年は數十年前米國大陸を旅行する時の困難な状態を勇ましく述へたるもの。金堀少年は北海道枝差の砂金採りの評判が高く今日には是非讀んで見ぬべきものだ。金堀少年は讀む者には非常に面白く可笑しく讀まうかなど騒き出さぬやう今から斷つて置く。

全壹冊四六判二百五十頁寫眞銅版口繪入
正價 金三拾錢
郵税 六錢

世界冒險譚 第二編

遠征奇談

海國民の最たる英國の二少年が商船リットン號に投じて世界巡航の途に上り、或は亞非利加或は亞米利加の原野に洋上に海島に歴遊して暴風巨浪を凌ぎ、猛獸を斃し、野火に苦しめられ、山賊と戦ひ、海賊を救ふ等、愉快、活潑、悲壯、勇烈以て少年子弟の志氣を興奮躍起せしむる大々の冒險譚を此遠征奇談とす。

全壹冊四六判二百五十頁寫眞銅版口繪入
正價 金三拾錢
郵税 六錢

第一編 勇少年

第二編以下はまたステキに面白いサア、御愛讀々々々

發兌元 文武堂 發賣元 博文館

每月壹回發行

●世界お伽噺二十三編 (山中古洞畫)

小亞三人片輪

全壹冊菊判 密書入美本 正價 金七錢 郵税 貳錢

さア、讀み給へや、世界お伽噺の二十三編三人片輪は小亞細亞のお伽噺にして鍛冶屋に生れた三人息子これが悉らす病痾にして二人の兄は零落し季の弟が世に出づるそのそもくから三人共河の中へ投げ落され助けられた國の王様が巧みに事をさばくさいふこれを我朝にたくらべなば大國越前政談録にさても能く似た物語り面白いのは請合なり

- 第一編 世界の色
- 第二編 珊瑚
- 第三編 魔
- 第四編 無
- 第五編 鬼
- 第六編 法
- 第七編 二
- 第八編 小
- 第九編 孫
- 第十編 大

每編密畫挿入

巖谷漣 山人著

世界お伽噺

●世界お伽噺第二十四編 (田井月耕畫)

白い鳥

全壹冊菊判 密書入美本 正價 金七錢 郵税 貳錢

白い鳥は蝦夷即ち北海道の口碑にして趣味多き物語なり話体頗る本島の復讐談に類し普通の口碑と稱するものに比しては大に進化せるものゝ如し殊此編我版圖内のもなれば讀んで同情の感更に深く兼て彼の地の風俗習慣を覗ひ知るべきものなり「種の神」「月の男」共に稀らしき物語と云ふべし、之を世界お伽噺の第二十四編とす

全壹部百冊

- 第拾參編 豫
- 第拾四編 王
- 第拾五編 續
- 第拾六編 猿
- 第拾七編 會
- 第拾八編 夢
- 第拾九編 驚
- 第廿編 光
- 第廿一編 雞
- 第廿二編 日
- 第廿三編 三
- 第廿四編 白

洋裝菊判美本

博文館

洋裝菊判美本

畫挿伯畫洋和名有筆執家大學文名著

少年讀本

行發回壹月每册拾五部全

壹册百卅頁餘

- 1 福地櫻痴君著 再高島 秋帆 (年方畫)
- 2 中郵秋香君著 白河樂翁公 (永洗畫)
- 3 戸河殘花君著 河井繼之助 (半古畫)
- 4 依田學海君著 三條實美公 (廣業畫)
- 5 饗庭篁村君著 曲亭馬琴 (觀山畫)
- 6 巖谷小波君著 井伊掃部頭 (沖舟畫)
- 7 暹塚麗水君著 山田長政 (春草畫)
- 8 桐生悠々君著 錢屋五兵衛 (永洗畫)
- 9 岸上實軒君著 春上日局 (春草畫)
- 10 野口珂北君著 水戸烈公 (大觀畫)
- 11 春山鶴峯君著 利野 (象堂畫)
- 12 大和田建樹君著 藤田 (永洗畫)
- 13 幸田露伴君著 伊能 (永洗畫)
- 14 武島羽衣君著 新井 (敬中畫)
- 15 中村桂軒君著 水野 (永興畫)

中江藤樹

國府犀東君著 (第廿九編)

近世中江藤樹先生の至孝と學識は人之を知らざるものなく其講書の堂なる藤樹書院の今日猶琵琶に儼存して墳域には香花の絶へざるを以て先生遺徳の遠く且大なるを知るに足らん本書叙述明確絶好の立志編なり

- 16 田山花袋君著 池田大雅 (觀山畫)
- 17 川原三階堂君著 木内宗吾 (春汀畫)
- 18 松崎紫山君著 西郷隆盛 (年方畫)
- 19 坂崎紫瀾君著 阪本龍馬 (年方畫)
- 20 大野洒竹君著 横井小楠 (不折畫)
- 21 石原笠堂君著 貝原益軒 (春汀畫)
- 22 渡邊霞亭君著 渡邊華山 (年峯畫)
- 23 石井研堂君著 中濱萬次郎 (耕溪畫)
- 24 勢多章之君著 近衛忠熙 (不折畫)
- 25 文學士笹川臨風君著 宮倫宗 (古洞畫)
- 26 堺枯川君著 周布政之助 (松亭畫)
- 27 内田魯庵君著 荻生徂徠 (春舟畫)
- 28 森山吐虹君著 松平伊豆 (華邨畫)

發兌元 東京日本橋區 博文館

Small white label on the blue spine.

White label with yellow lines on the blue spine.

